



特集

建築のまちを

旅する 09

金沢

谷口吉郎の「意匠心」を育んだ
歴史が重層するバウムクーヘン都市



表紙の写真

〈旧金沢市立図書館／別館（現・金沢市立玉川図書館／近世史料館）〉外観

総合監修 | 谷口吉郎
設計 | 谷口・五井設計共同体

旧日本専売公社の工場跡地に市立図書館をつくる計画において、総合監修を手がけた谷口吉郎は、煙草工場の一部を保存改修して活用することを提案し、図書館本館の新築設計は息子の吉生に託した。写真の左手に写るコールテン鋼の壁は本館、右手に写る煉瓦造の建物が旧煙草工場の別館だ。父子にとって最初で最後の協働作品となったこの建物は、新旧の建物がモザイク状に点在する金沢の、理想的なまちのあり方を示唆している

[写真:石田 篤]

左写真

〈谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館〉常設展示

設計 | 谷口建築設計研究所

谷口吉生が設計した「谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館」の常設展示室には、1974年、谷口吉郎の設計により建てられた「迎賓館赤坂離宮 和風別館『游心亭』」の広間と茶室が再現されている。照明の六角形は吉郎が好んで用いたモチーフ。広間から広縁の上まで架かる天井は、平天井と斜め天井を組み合わせた独創的なもの。細い垂木と天井の棹縁との巧みな組合せも、洗練された「和」と現代的な意匠の融合を図るものだ。ここでは、吉郎の和風建築の傑作といわれる空間のプロポーションを直に感じ、繊細な造作の数々から職人の優れた手仕事を直に見ることができる

[写真:石田 篤]

LIXIL eye no.21
2020年2月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL
編集発行人 | 早川氏幸
LIXIL ジャパンカンパニー
TH統括部
〒136-8535
東京都江東区大島2-1-1
Tel: 03-6837-1646
Fax: 03-6837-1662
制作 | 株式会社フリックスタジオ
デザイン | 株式会社ラボラトリーズ
印刷 | 竹田印刷株式会社

* 本記事の無断転載を禁じます
* 本文中の敬称は省略させていただきます

次号『LIXIL eye』no.22は、
2020年6月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
<http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

CONTENTS

特集

04 建築のまちを旅する | 09

金沢

06 テーマ1

谷口吉郎の「意匠心」を育んだ
歴史が重層するバウムクーヘン都市

ナビゲーター | 水野一郎

12 谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館／旧金沢市立図書館／別館（現・金沢市立玉川図書館／近世史料館）／
旧石川県繊維会館（現・金沢市西町教育研修館）

16 金沢建築めぐり

22 住宅クロスレビュー | 09

室内風景

阿部 勤「中心のある家」× 坂牛 卓「神楽坂の家」

32 建築家の〈遺作〉 | 06

広瀬鎌二「勝山館跡ガイドンス施設」

談 | 矢野和之

36 新世代・事務所訪問 | 09

studio velocity

ナビゲーター | 門脇耕三

44 構造家の新発想 | 09

構造最適化からの解放

金田泰裕

48 触覚デザイン | 06

吉阪隆正の階段手すり

ナビゲーター | 笠原一人

52 土木のランドスケープ | 09

源兵衛川

ナビゲーター・文 | 八馬 智

58 Design + Technique

真言宗総本山 東寺駐車場内観光トイレ

60 TOPICS

「窯のある広場・資料館」リニューアルオープン
文 | 後藤泰男

65 INFORMATION

LIXILからのご案内／展覧会+イベント／LIXIL出版 新刊案内

68 紙上の建築 | 09

「2」の世界の45と90で、「3」の世界を見る

野口理沙子 + 一瀬健人 (イスナデザイン)



近世以来の文化が色濃く残るまち金沢。かつて百万石の経済力を誇ったこのまちには、九谷焼、加賀友禅などの文化財ばかりか、建築もまた江戸期の名作が残る。明治から戦前にかけてもその力は衰えず、繊維と軍需がまちを活性化。名建築が立ち並ぶ。そこに生まれたのが谷口吉郎だ。その血を引く谷口吉生とともに、金沢の建築スピリットが近現代に昇華した名作を生み出した。金沢は谷口建築の宝庫でもある。結果、金沢の建築リテラシーは高く、最新建築の話題にも事欠かない。各時代の名建築がモザイクのように立ち現れる、ここは200年分のタイムトリップを楽しむまち。

金沢市内を流れる2つの清流の1つ、犀川。遠くに戸室山や医王山が見える。金沢三文豪のひとり、室生犀星はこの川の風景をこよなく愛し、「うつくしき川は流れたり そのほとりに我は住みぬ」など、作品にたびたび登場する。犀星と親しくしていた谷口吉郎も犀川のほとりに育ち、「この川が詩人の詩心に感化を与えているように、私の意匠心もこの川から影響を受けている」と綴る。谷口が設計した犀星の文学碑（10ページ参照）は右岸（写真では川の左手）にあり、それより少し下った向こう岸に「谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館」が2019年に開館した【写真：石田 寛】

金沢

特集 建築のまちを旅する 09

テーマ1

谷口吉郎の「意匠心」を育んだ歴史が重層するバウムクーヘン都市

ナビゲーター | 水野一郎 (金沢工業大学教授、谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館館長)

取材・文 | 長井美咲
写真 | 石田 篤 (特記以外)



谷口吉郎

たにぐち・よしろう

1904年、石川県金沢市の九谷焼窯元の家の長男として生まれる。東京帝国大学で建築を学び、東京工業大学教授となる。のちに「博物館明治村」の初代館長に就任。1979年に逝去。略歴は11ページ参照

[写真提供：谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館]

01 | 惣構

城を中心とする城下町を囲い込んだ堀や、その城側に土を盛り上げてつくった土居(どい)などの防御施設のこと。金沢では内・外二重に築かれ、内惣構は1599(慶長4)年、外惣構は1610(慶長15)年に築造。明治以降は防御線としての機能が失われたため、大部分の土居は堀の埋土として使用されて消失。堀部分はかつて幅が狭まって用水として使われている

03 | 旧陸軍第九師団司令部庁舎

木造2階建て瓦葺きの建物で、1898(明治31)年に金沢城内に建てられ、1968(昭和43)年に市内の石引に移築後は県庁分室として使われていた。旧陸軍将校の社交場だった旧陸軍金沢偕行社の木造2階建ての建物(1898年築)とともに、県立歴史博物館と県立美術館の間の敷地に移築され、東京国立近代美術館工芸館移転後の「国立工芸館」として2020年の夏に開館予定

「東宮御所」「帝国劇場」「東京国立博物館東洋館」などの設計を手がけた建築家の谷口吉郎。その生まれ故郷である石川県金沢市に2019(令和元)年7月、「谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館」が開館した。谷口が育った住居の跡地を、谷口の遺言により谷口家が市に寄贈して建てられた。

谷口は、自らの「意匠心」が育まれたのは金沢のおかげだと、金沢への恩を終生忘れず、その将来を気にかけて。金沢が全国に先駆けて「伝統環境保存条例」を制定した背景にも谷口の尽力がある。「歴史が重層する“バウムクーヘン都市”として、いま観光客に人気なのは、谷口さんのおかげ」。こう語る「谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館」館長の水野一郎・金沢工業大学教授の案内のもと、金沢の中心部を巡った。

2015(平成27)年に北陸新幹線の長野ー金沢間が開業して以来、金沢は活況を呈している。巨大な「もてなしドーム」と「鼓門」を核とする駅東広場から、近江町市場が面する武蔵ヶ辻、現在の武蔵交差点まで歩いて10分少々。右折して、金沢の中心市街地を取り囲むメインストリートの百万石通りを南下すると、繁華街の香林坊までの沿道にはホテルやマンションが続々と開業・建設中だ。

「ホテルが増えるのは大歓迎です」と水野一郎教授が言う。「この通り沿いにはかつて銀行や信用金庫、保険や証券の会社が並んでいました。それらが撤退したところにホテルやマンションが建ち、金融単機能から多機能なまちへと転換して以前よりもずっとにぎわっている。香林坊にある日本銀行金沢支店も駅の西側への移転が決まりました。いまの場所はすぐ裏手に町家がたくさん残ります。まちの成長を担う部分と、まちの性格をつくる部分、役割は分けるほうがいい」。駅西地区は2003(平成15)年に石川県庁舎が移転するなど、目覚ましい発展を遂げている。

各時代が年輪のように層をなして共存

新幹線の開業前から金沢は兼六園、茶屋街、加賀友禅や九谷焼などの伝統工芸、豊かな食文化と、名所・名物に不足はなかった。その大半は百万石の栄華を誇った加賀藩に由縁する。加賀藩は藩祖

の前田利家が1583(天正11)年に金沢城に入ったことに始まり、江戸時代には人口規模で江戸・大坂・京の三都に次ぎ、尾張名古屋と並ぶ大都市だった。金沢の地勢は、卯辰山丘陵、小立野台地、寺町台地の3つの台地と、浅野川と犀川(さいがわ)の2つの川を中心に成り立つ。中央の小立野台地に城があり、まちは同心円状に広がった。惣構⁰¹の遺構や武家屋敷跡、3つの台地に配置された寺院群などは城下町の名残だ。また、兼六園は歴代藩主により形づくられてきた庭園であり、茶屋街⁰²は江戸後期に、風紀の乱れや治安を管理するために藩が新たに町割りして生まれた。

金沢は小京都と呼ばれることも多い。しかし、「文化の主体は、京都は公家で、金沢は武士。ここが両者の根本的な違い。公家の文化が『雅』なら、武士のそれは『粹』と言える」と、前・金沢市長で5期20年つとめた山田保氏は著書『まちづくり都市 金沢』(岩波書店、2018)のなかで説く。2代藩主利長は京文化を取り入れたが、5代藩主綱紀以降は江戸文化を徹底して受け入れ、武士の文化を町人の文化へと浸透させていった。前田家は諸大名のなかでは最大の百万石を有していたことから家臣の数も最大規模で、それにともない加賀藩は大消費地として豪商を多く輩出し、裕福な町人の間で茶の湯などの文化が発達した。

藩政が終わると、金沢にも西洋文化の波が押し寄せ、「旧第四高等学校本館」「旧金澤陸軍兵器支廠」などの煉瓦建築、「旧陸軍第九師団司令



02 | ひがし茶屋街(右)と主計町茶屋街(左)

1820(文政3)年に加賀藩が近辺に点在していた料亭・茶屋を集めたひがし茶屋街は、200m四方に広がる町割。特に二番丁から卯辰山を背景に高台の料亭・山乃尾を望む風景はよく知られる。建物は改築を繰り返しているが、格子戸と大戸、2階の造りは江戸期の意匠が踏襲されている。一方、主計町茶屋街は、浅野川に面した茶屋街で、明治から戦前にかけて栄え、当時の建物が残る。ひがし茶屋街に比べ物販に転向した店は少なく料亭やカフェが軒を連ねる。裏道も風情があり、暗がり坂、五木寛之が命名したあかり坂がある。町名は邸宅のあった藩士「富田主計」に由来。全国初の旧町名復活例となった。両茶屋街ともに国の重要伝統的建造物群保存地区

部庁舎⁰³「旧石川県第二中学校本館」などの擬洋風の木造建築がつくられた。また、大正末期に建てられた旧石川県庁舎(現・石川県政記念いのき迎賓館)は、県内初の鉄筋コンクリート造だ。この旧県庁舎のデザインは明治期の様式建築から大正モダニズム建築に移行する過渡期のもの。そして「加能合同銀行本店(現・北國銀行 武蔵ヶ辻支店)」など昭和初期の銀行建築には昭和モダンなデザインが見られる。これらの建物は現在、用途を変えて活用され、軍都・学都・商都としての歴史、文化や技術の発展をいまに伝えている。

金沢は第2次世界大戦で戦禍を免れ、歴史が重層する環境が残った。戦後、軍施設の撤退によって生まれた兼六園周辺の空き地には「金沢歌劇座」「金沢市文化ホール」などの文化施設が建てられ、同時に公園や緑地が整備された。さらに平成期には「金沢21世紀美術館」や「鈴木大拙館」が建てられ、新たなイメージが加わる。そして2019(令和元)年に「谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館」が開館。谷口吉郎の著書『雪あかり日記』(中央公論美術出版、1974)の「建築こそが歴史の花であろう。過去の花、現在の花、色とりどりでいつも私の心をひくものは、その建築の美しさに潜む意匠心である」というくだりが頭に浮かぶ。

水野教授は、各時代が年輪のように層をなして共存する金沢のまちの姿を「バウムクーヘン」にたとえる。各時代の建物は旧市街地に混在しているため、「空間的に見るとモザイク状」とも。そして「谷口さんは自分の意匠心、すなわちデザインマインドは金沢に育まれたと自著のなかで繰り返し述べていますが、私は、谷口さんがいまの金沢を育ててくれたと思っています」と語る。「我々の役目は、各時代の良い層を残し、自分たちの時代の層を足していくこと。伝統と創造、保存と開発、この両輪があって



こそ、都市に歴史的な重層性が生まれる。谷口さんはそう考えていました。

犀川、兼六園、旦那衆からの学び

谷口は1904(明治37)年、「金陽堂」という九谷焼の窯元に長男として生まれた。谷口家は士族だったが、明治期の初めに祖父が製陶を開業したという。生家は片町にあり、店舗と工場を併設していた。幼少期の谷口は、勢いよく燃える窯の炎や、絵付けをする陶工たちの仕事ぶりを見て楽しみ、目に焼きつけた。自著『建築に生きる』(日本経済新聞社、1974)のなかに「窯から取り出される製品の発色が、私には忘れられない鮮やかな色彩となっている」という記述もある。

家のすぐ近くを流れる犀川も、谷口少年にとっては楽しい遊び場だった。「河原で小石を組んで小川を作り、木片で橋をかけた。その小さい手作りの庭を身をかがめながら股眼鏡でながめると、遠くに戸室山や医王山の山々が、美しい絵のように見える。(略)川の石が水でぬれると、石の肌がいろいろの美しい色を発することを、幼い私の目は知っていた」と自著で思い出を綴る文章では、「建築家となった私の意匠心はこのように重心のころから、ふるさとの川から造形的な感化を受けていた」と結んでいる。

近所には菓子屋や薬種屋、茶舗、油屋、呉服屋、料理屋など、さまざまな商家があり、その主人である旦那たちは伝統に育てられた美的教養を重んじ、城下町にふさわしい気品を尊ぶという文化をきちんと引き継いでいた。一方で、金陽堂をはじめ、どっしりとした構えの和風建築が立ち並ぶ町内にはハイカラな洋風スタイルの店もあり、明治時代の文



旧川緑米穀店 [現・金澤町家情報館]
(江戸末期竣工、2016年改修)

金沢市では1950年以前に建てられた建物のうち、金沢の伝統的な構造、形態、意匠をもつ木造の建物を総称して「金澤町家」と呼んでいる。その保全活用、情報発信の役割を担う施設。建物は江戸末期に大工が自宅として建てたとされ、所有者の変遷を経て、金沢市に寄付。丁寧な改修により建物の風情を損なうことなく、耐震性や居住性を向上させた。第40回金沢都市美文化賞受賞、市指定保存建造物。関連21ページ [写真提供：金沢市]



尾山神社神門 (1875年竣工)

加賀藩祖・前田利家を祀る神社として創建され、その正門として建築された。和・洋・中、3つの様式を木造で模している。1層目は戸室石を積んだ木骨煉瓦造、2・3層目は銅板と漆喰塗りで、3層目にはめられたギヤマンには日没後に灯がともる。かつては日本海を通る船の灯台の役目を果たしていたという。設計は、金沢の大工棟梁・津田吉之助。重要文化財。関連20ページ [写真：小松正樹]



旧第四高等学校本館

〔現・石川四高記念文化交流館〕(1891年竣工)

当時文部省の技師だった山口半六と久留正道が設計した、学都金沢を象徴する建物。煉瓦造2階建て、寄棟屋根の棧瓦葺きで、腰周りや軒周りに油薬煉瓦や白煉瓦を用いて赤煉瓦との強いコントラストをつくっている。向かって左側が石川四高記念館(無料)、右側は石川近代文学館(有料)で、前庭には谷口が設計した「四高記念碑」と「第四高等学校寮歌記念碑」(関連20ページ)がある。第31回金沢都市美文化賞受賞、重要文化財。関連20ページ【写真:小松正樹】



旧石川県第二中学校本館〔現・金沢くらしの博物館〕(1899年竣工)

木造2階建ての洋風建築。左右対称の平面で、正面に車寄せを延ばす。両脇の尖塔と中央の尖った破風は合わせて三尖塔と呼ばれていた。外壁は下見板張りや縦板張りを組み合わせて構成。設計者は石川県技師の山口孝吉。建物は1948年以降、紫錦台中学校の校舎として使われたが、1978年からは博物館として一般公開され、町家の座敷を再現し、金沢の風物詩や料理、昔ながらの生活用品などを展示している。重要文化財。関連21ページ【写真:小松正樹】



旧金澤陸軍兵器支廠〔現・石川県立歴史博物館〕

(1909年竣工〔現・第3棟〕、1913年竣工〔現・第2棟〕、1914年竣工〔現・第1棟〕、1986年・2015年改修)

陸軍の兵器庫として建てられ、金沢美術工芸大学の校舎として使われた時期を経て、現在は歴史博物館となっている。並行する3棟の煉瓦造建物は、補強の方法がそれぞれに異なり、第1棟は内側に鉄筋コンクリート造、第2棟は内側に鉄骨造の構造を入れたのに対し、第3棟は木造と煉瓦造による外來の構造を基本的に活かし、それに最小限の鉄骨補強を加えることで済ませている。第10回金沢都市美文化賞・1987年中部建築賞・1991年日本建築学会賞受賞、重要文化財。関連21ページ【写真:小松正樹】



金沢市民芸術村(大正末期-昭和初期竣工、1996年改修)

紡績工場跡地に残っていた倉庫を改修し、市民による日常的な創造活動の場として活用。構造は木造で、外壁は3棟が煉瓦積み、残りが鉄筋コンクリート造で、6棟の建物は演劇の稽古、音楽の練習、アートの制作・展示などの機能が割り振られ、それに応じた設計に。来訪者がいつでも利用できるオープンスペースとレストランも設けられた。外側には池とコ罗纳ードが伸び、直線状に連なる建物群を結んでいる。1997年グッドデザイン大賞・1999年日本建築学会作品選奨受賞。登録有形文化財(事務所棟)。関連19ページ【写真:小松正樹】



石川県政記念しいのき迎賓館(1924年竣工、2010年改修)

アールデコの装飾が目を引く建物は、国会議事堂の設計にも携わった大蔵大臣官房臨時建築課の矢橋賢吉の設計により、石川県庁として1924年に竣工。県内初の本格的な鉄筋コンクリート造の建物だった。建物の正面側を部分保存し、セミナールーム、ギャラリー、レストランなどを入れて活用している。第33回金沢都市美文化賞特別賞受賞。関連20ページ【撮影協力:石川県政記念しいのき迎賓館、写真:小松正樹】

明開化の気分も漂っていた。明治政府が九谷焼を外貨獲得の輸出品のひとつとして奨励していたことから、父は海外にも出かけていたという。

谷口が小学生のころ、住まいだけが寺町に移った。現在の「谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館」の敷地にあたる場所で、片町とは犀川を挟んで反対側になる。両親は謡や茶をたしなみ、家老の家にあった茶室を新居の庭に移築し、そこに客を招いてよく茶会を催した。金沢には茶と能が家庭に普及していて、「茶と能は父母を通して、私の美的センスに感化を与えている」と谷口は自著に記している。

谷口は寺町の家から石川県立金沢第二中学校(以下、二中)と旧制第四高等学校(以下、四高)に通う。二中には兼六園を通り抜けて通学。学校帰りに広い園内を隅々まで歩き、松や桜など木の種類を覚えていった。冬の雪景色を含め、四季折々に美しい姿を見せる兼六園は、谷口にとって「蔵書の豊かな図書館」だった。

関東大震災で建築への道を決意

1923(大正12)年、谷口が四高の2年生のときに関東大震災が発生。金沢の地面も微かに揺れたその大地震で、東京の浅草凌雲閣や丸ビル、三越、帝国劇場などが崩落、焼失した。

これらは父母に連れられての東京見物の際に目を見張った建物だ。谷口は大きなショックを受け、「幼いころから建築と庭園が好きだったので、それへの志向が一層強められるのを、その時、わが胸に感じた」(『建築に生きる』)。そして家業を継いでほしいという両親や祖父の期待を感じながらも、1925(大正14)年に東京帝国大学建築学科に進学。大学の設計製図では「自分の体内に幼い時から蓄積していた造形センスが躍動するのを覚えた」と自著で語る。谷口の製図は自由奔放で、同級生たちは驚いていたという。なお、同級生には前川國男、市浦健、横山不学などがいた。

谷口は工場建築を意匠的に扱ってみたいと考えて卒業設計に「製鉄所」を選び、大学院に進んだのちも工場建築を研究。そして1930(昭和5)年、26歳のときに東京工業大学の講師となり、建築計画の講義を受け持つ傍ら、学内の「復興部」で製図の仕事に従事。翌年助教授となる。

東京工業大学の建築学教室では主に建築構造学の研究が熱心に進められ、谷口も実験室に入り、建築の理学的特性の研究を始めた。そして「鉄筋コンクリート構造物の電熱現象」「屋内気候の自然対流」「サイロ内の粉状物質の流動」といった研究

結果を日本建築学会で発表。

そんな折、1934(昭和9)年に関西地方を室戸台風が襲い、甚大な被害をおよぼす。特に木造の小学校校舎が強風で押しつぶされ、多くの児童が生命を失ったことから、学界では「風圧」の研究が緊急課題となり、谷口も学術振興会から委託を受けて、東京・駒場の東京大学航空研究所(現・東京大学宇宙航空研究所)で「風洞実験」に従事。強風の複雑な流動現象を調べ、「建造物に作用する風圧の実験研究」に取り組んだ。その研究結果は1942(昭和17)年に日本建築学会賞の学術賞を受賞というかたちで認められる。谷口は工学の研究者の一面ももち、そんな自分の姿を、画家であり建築家であり、同時に流体力学の優れた研究者でもあったレオナルド・ダ・ヴィンチに重ねていた。

1937(昭和12)年、長男の吉生が誕生。翌年、ベルリンの日本大使館に庭園を建設する仕事でドイツに出張するが、まもなく戦争の色が濃くなり工事現場は休業に。谷口は帰国命令を受けるまで、ドイツはもとよりフランスやイタリア、スイスなどにも足を伸ばして建築と美術館巡りに動んだ。先述の『雪あかり日記』はこのヨーロッパ滞在時の記録だ。

谷口の建築作品は「東京国立博物館東洋館」(1968)を筆頭に日本の造形を意識したものがよく知られるが、自邸や「慶應義塾幼稚舎」(1937)など戦前までの作品はいわゆるモダニズム建築だ。ただし、谷口は前川や坂倉準三など同時代の建築家とは違い、モダニズム建築を受け入れながら疑問の目も向けていた。ル・コルビュジエに批判的な論考も発表している。水野教授は「モダニズムは自分たちの文化としての古典様式の美を超えようとして生まれた西洋発祥のものだから、美意識の点で疑問をもったようです。それでモダニズムの理論や空間構成は信じるけれど、美という点では日本を意識し、それが『清らかな意匠』へと発展します」と語る。

戦後すぐの1947(昭和22)年に建てられた信州馬籠の「藤村記念堂」で、谷口は日本の伝統に根ざした空間要素を巧みに取り入れ、これを機に和風を加味したモダニズム建築へとスタイルが変わっていく。なお、谷口は藤村記念堂と慶應義塾大学の校舎の設計が評価され、1949(昭和24)年、日本建築学会賞に新設された作品賞を受賞。学術賞に続く学会賞受賞だ。

故郷のまちづくりに尽力

谷口の金沢での作品は多くはない。最初は「徳田秋聲文学碑」⁰⁴で、「藤村記念堂」と同じ1947(昭和22)年に建立された。敗戦直後で人々の生活は



北国銀行 武蔵ヶ辻支店(1932年竣工、2009年改修)

尖頭アーチの開口部とスクラッチタイルの外装が印象的な建物は、世界平和記念聖堂や日生劇場などを手がけた建築家・村野藤吾の設計により加能合同銀行本店として戦前期に建築。隣接する近江町市場が再開発されるにあたって、曳家を行い位置を20mほど動かすと同時に、免震改修も施して保存を行った。改修後は銀行の支店としてだけでなく、ギャラリーの機能も内部に収め、人々に親しまれる建物となっている。関連19ページ【写真:小松正樹】



金沢歌劇座(1962年竣工、2010年改修)

観光産業と文化の振興を図る目的で金沢市観光会館として竣工。2007年から現在の名称に変わった。コンサートやさまざまな発表会の催しに用いられる多目的ホールや会議室を擁する。谷口吉郎の監修のもと、日建設計工務(現・日建設計)が設計。目抜き通りに向かって深い庇を延ばし、人々を迎え入れている。行灯のようなホワイエの照明や、ピロティの戸室石張りなど、谷口好みのデザインがところどころに見て取れる。関連21ページ【写真:小松正樹】



金沢市文化ホール(1982年竣工)

899名収容のホール棟と、展示室、会議室などからなる会議棟の2棟が、敷地を斜めに貫くアプローチ空間を挟んで向かい合う。その中央には広場が設けられ、1本の柱で支えられた大屋根が架かる。これは冬季に樹木を積雪から守る「雪吊り」を模したとされる。都市の中に実現した雪国らしい良質な公共空間だ。設計は駒沢体育館などの代表作がある芦原義信が担当した。1983年中部建築賞受賞。関連20ページ【写真:小松正樹】



室生犀星記念館(2002年竣工)

室生犀星の生家跡に建てられた記念館。閑静な住宅地のなかに、ガラス張りのファサードを現して立つ。素材は異質だが、スケール感を整えているために、まち並みを乱してはいない。内部は内外が交錯するような空間構成で、犀星が愛したであろう庭の風景が建築に取り入れられている。水が張られた中庭は、犀川の流れを思い起こさせる。つくばいや石塔は犀星の家の庭にあったものを配置している。第25回金沢都市美文化賞受賞。関連21ページ【写真:小松正樹】



金沢21世紀美術館(2004年竣工)

どちらの側からもアクセスできるようにと、裏表のない円形の平面が採られた。内部には広さや天井高が異なるさまざまな展示室がバラバラに置かれている。その隙間の使い方により、展示経路も自由に設定することが可能。また外周をぐるりと囲むガラスを通して、まちと美術館が強く通じ合う関係を生み出した。ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展展示部門「金獅子賞」ほか受賞多数。関連21ページ【写真:小松正樹】



05 | 旧石川県美術館

〔現・石川県立伝統産業工芸館〕(1959年竣工)

谷口の設計により、「石川県美術館」として1959(昭和34)年に竣工。美術館の新築移転にともない、1984(昭和59)年に「石川県立伝統産業工芸館」になった。敷地は兼六園の一角にあり、重要文化財の建造物「成異閣」に隣接することから、谷口は静かで慎ましい建物を意図した。外観はスケールを小割にし、庇や格子、木割りなどの和のデザインをきめ細かく取り込んでいる。さらに雨や雪に配慮し、地元産材も活用。内部はモダニズムの空間構成だが、「陳列品を主役とし、建築はむしろ脇役となるような意匠が、ここでは特に大切だった」と谷口は記す。美術館は多くの人の美術に対する愛情の結晶を示すものだから、建築家の設計はそれに美しく寄り添う必要があるという趣旨の一文にも谷口の金沢への優しい眼差しが感じられる。関連21ページ

鈴木大拙館(2011年竣工)

金沢出身の仏教哲学者で、東洋の思想や日本文化を世界に広めた鈴木大拙(1870-1966)を紹介する施設。設計は谷口吉生。全体は「玄関棟」「展示棟」「思索空間棟」を回廊で結び、各棟に「玄関の庭」「露地の庭」「水鏡の庭」を配した構成だ。展示物が限られるなかで、日本文化の根源を説く哲学者にふさわしい空間構成を模索するにあたり、設計者はその典型を、日本の「床」の空間に求めた。写真は「水鏡の庭」に浮かぶ「思索空間棟」で、この空間は全体が「最小の設えによって姿を変える『床』の空間そのもの」と谷口吉生は述べる。関連21ページ〔撮影協力：鈴木大拙館、写真：小松正樹〕



04 | 徳田秋聲文学碑(1947年竣工)

自然主義文学の代表的作家で金沢生まれの徳田秋聲(1872-1943)の業績を讃えようと市民が建立を計画し、谷口に設計を頼んだ。赤戸室石の角柱と、その前に丸盆を配した碑を、黒い能登瓦を載せた土塀が見守る。「東京から金沢に帰ると、家々のかわらの美しさにまぎらうたれる。そのへんのところに秋声文学の色つやがあるように私には思える」と谷口は書き残す。関連20ページ



室生犀星文学碑(1964年竣工)

谷口は、金沢生まれの詩人・小説家の室生犀星(1889-1962)の碑も設計。流し雛を石で表現したもので、1964年に犀川の川べりに建てられた。胸部に犀星の杏の詩が彫り込まれた雛形の碑は、杏の五弁を表す五角形の台座に載る。その台座は、犀川の割石を敷き詰めた延段の上に載る。関連21ページ



金沢市立玉川図書館にて。水野教授は大谷研究室で金沢工業大学のキャンパス設計に携わったのを機に、まちづくりをしたいと1976年に金沢移住〔写真：編集室〕

貧しく物資も乏しいのに、両者とも地域の人たちが「つくりたい」と声を上げた。そのことに谷口は感動する。「余裕はないはずの時期に、文化がすぐに立ち上がった。谷口さんはそこに日本人の心意気や日本的な美意識を感じた。だから藤村記念堂は日本の形態、空間、デザインなのです」と水野教授。秋声文学碑は石の角柱と丸盆のひっそりしたものが、背後に金沢のまちにちなむ土塀を設けている。

建築では「石川県繊維会館(現・金沢市西町教育研修館)」が1952(昭和27)年に、「石川県美術館(現・石川県立伝統産業工芸館)」⁰⁵が1959(昭和34)年に竣工。水野教授は「金沢での谷口建築には優しさを感じられます。西町教育研修館は、全体の形はモダニズム的ですが、勾配屋根で瓦を載せている。金沢の雨や雪の多さとまち並みへの配慮からです。丹下健三さんなどがモダニズムを推し進めていた時代に、このデザインは勇気のいることだったと思います」と話す。

谷口が金沢のまちのあり方を心配し始めるのはこのあとだ。戦後日本の各都市は、初めは復興の名のもと、やがて車社会に対応するために近代化していく。その動きに乗り遅れまいと、金沢のような非戦災都市でも、古い建物やまち並みを壊して新しい建物を開発していく必要があるという風潮が生まれた。

谷口は、何の規制もないまま、開発によって城下町特有の金沢のまち並みが失われ、景観が変わっていくことを危惧した。そして1967(昭和42)年、東山魁夷など5人の有識者からなる委員会を設けて「金沢診断」と呼ばれる調査を行ったうえで、当時の市長に「金沢の持つ優れた環境が、都市の近代化の中で調和し保たれていくべき」と、開発と保存を両立させるまちづくりを提言。それが、金沢市が翌年制定した「伝統環境保存条例」につながる。全国で初めて伝統的な環境の保存を定めた条例だ。

谷口が故郷のまちづくりにかかわったのはこれだ

けではない。金沢市役所前の特徴ある広坂通りも、実は谷口の発案をもとに整備された。いまは用水と松・桜の並木を挟んで両側二車線だが、以前は片側一車線で、用水の北側は県庁や四高の敷地だった。それを両側二車線に広げようと関係各所を説得しつづけたという。

明治時代の建築の保存にも谷口は尽力した。母校の校舎が文化財として保存されているのも、文化庁に關係していた谷口の働きかけによる。四高本館は1969(昭和44)年に国の重要文化財に指定され、現在は「石川四高記念文化交流館」として活用されている。また、現在は「金沢くらしの博物館」の二中本館は1974(昭和49)年に市の文化財に指定された。

四高の物理化学教室と武術道場「無声堂」、金沢監獄の煉瓦造の正門と木造の中央看守所・監房は、愛知県犬山市の「博物館明治村」に移築保存されている。1965(昭和40)年に開園した明治村の発案者は谷口であり、四高時代の級友で、中部財界の指導者だった名古屋鉄道社長の土川元夫の全面協力を得て実現。谷口は初代館長に就任した。

金沢のあるべき姿を親子で示す

そして、息子吉生との唯一の協働作品である「金沢市立図書館(現・金沢市立玉川図書館)」では、谷口は既存の煉瓦造の煙草工場を再利用した別館(現・近世史料館)の改修設計を手がけ、隣に新設する図書館本館の設計は吉生に任せた。この建物は、金沢のあるべき姿をふたりがそれぞれ示したものと水野教授は言う。

「バウムクーヘン都市では、古い建物をどう残していくかが大事なところ。この図書館ができたことで、煙草工場の建物の評価が以前よりも上がりました。中のアクティビティもなるほどと思わせる。建物が古くとも新しい役割を与えてきちんと使われれば、残

してよかったと市民は思う。一方、吉生さんは現代建築を実に巧みに古い煉瓦建築やまち並みに調和させている。モザイク状の都市では、新旧の境界にあたる『際』をよく考えないと、混在ではなく混乱になってしまいます。混在していてもいいね、という意識を市民がどれだけもちうるか。この建物は良いが、あの建物は悪い、と市民がどれだけ言えるようになるか。金沢のようなまちでは建築に対する市民の意識が高くなければなりません。そのために建築家が果たすべき役割も大きい」。

金沢で頼りになるのが旦那衆、すなわち経済人たちだ。水野教授は44年前に東京から金沢に移住して、まず「金沢は旦那衆がしっかりしている」と思ったという。「私が金沢に来たばかりのころの話で、金沢には江戸時代からの用水⁰⁶が50本以上あるのですが、近代化が進むにつれ、不便だからと市民は勝手にフタをして駐車場などにしていた。そし

たら旦那衆が、金沢の個性である用水にフタをするとは何ごとだ、フタを外せ、という運動を起こしたのです。旦那衆はまちに対して文化的な提言をたくさん行っています。兼六園周辺を文化ゾーンにする計画も旦那衆を中心に知事に提案して、金沢大学や県庁が移転したあと何か建てるのではなく公園や緑地の整備を推進しました。『金沢都市美文化賞』⁰⁷という景観の表彰制度も旦那衆が立ち上げたものです。私が辰野金吾やヴォーリズの建物の保存運動⁰⁸を行ったときも、彼らは先頭立って応援してくれました。谷口さんが言っていた旦那精神はいまもずっと受け継がれています。谷口さんも旦那みたいなものですよ」。

「実家の敷地は、私が世話になった金沢に寄贈するように」。金沢市立図書館が竣工した翌年の1979(昭和54)年、谷口はこの言葉を吉生に遣して旅立った。

06 | 用水

金沢には55本の用水が流れている。これらは藩政時代から利用されてきたが、都市化の進展とともに存在価値が低下。その状況を憂い、1979年に地元経済人の集まりである金沢経済同友会が「金沢の用水」というレポートをまとめて用水の保存と再生を訴えた。こうした市民活動を受けて市は1996年に全国初の「金沢市用水保全条例」を制定。最初のモデル地区である鞍月用水では、駐車場化した私有橋の撤去や用水の開渠化、石積み護岸などの修景整備が進められた

07 | 金沢都市美文化賞

市民の景観に対する関心を高めるために、1978年に創設された。金沢経済同友会、金沢商工会議所、金沢青年会議所で構成される金沢都市美実行委員会が主催する。全国でも珍しい民間主導の表彰制度であり、景観賞では最も歴史がある

08 | 保存運動

「旧日本生命金沢支店」(辰野金吾設計、1916)や「大同生命金沢支社」(ヴォーリス設計、1927)の保存運動は実らなかったが、これら近代建築の取り壊しが相次いだことから、市内の歴史的建造物保存の機運が高まり、1982年の「伝統環境保存条例」改正により「指定保存対象物制度」が創設された

水野一郎 みずの・いちろう

1941年東京都生まれ。1964年東京大学工学部建築学科卒業。1966年東京藝術大学大学院修士課程修了。株式会社大谷研究室を経て、1976年金沢工業大学助教授に就任。1979年より同大学教授、現在に至る。並行して1980年に金沢計画研究所を設立し、顧問として建築設計や地域計画に従事。さらに2019年、「谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館」の館長に就任。

長井美暁 ながい・みあき

編集者、ライター/山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、「室内」編集部に所属。2006年よりフリーランス。

谷口吉郎 略年表	
1904(明治37)年 金沢市片町の九谷焼窯元の長男として生まれる	1942(昭和17)年 「建築物の風圧に関する研究」で日本建築学会賞受賞
1925(大正14)年 第四高等学校卒業、東京帝国大学工学部建築学科入学	1943(昭和18)年 工学博士号を取得。東京工業大学教授となる
1928(昭和3)年 東京帝国大学大学院入学	1947(昭和22)年 「徳田秋聲文学碑」建立。以降、70以上の碑を全国に建てる。金沢には「室生犀星文学碑」や「四高記念碑」も
1930(昭和5)年 東京工業大学講師となる	1949(昭和24)年 「藤村記念堂」他で日本建築学会賞受賞
1932(昭和7)年 デビュー作「東京工業大学水力実験室」を設計	1952(昭和27)年 文化財専門審議会専門委員となる。「石川県繊維会館(現・金沢市西町教育研修館)」竣工
1937(昭和12)年 長男・吉生誕生	1956(昭和31)年 「秩父セメント第二工場」で日本建築学会賞受賞
1938(昭和13)年 ベルリンの日本大使館の日本庭園をつくるため、外務省嘱託としてドイツに出張	1957(昭和32)年 毎日新聞社刊『修学院離宮』で毎日出版文化賞受賞
	1959(昭和34)年 「石川県美術館(現・石川県立伝統産業工芸館)」[千鳥ヶ淵戦没者墓苑]竣工
	1961(昭和36)年 「東宮御所」の設計その他で日本芸術院賞受賞
	1962(昭和37)年 日本芸術院会員となる。「ホテルオークラ」竣工
	1965(昭和40)年 「博物館明治村」の初代館長に就任。東京工業大学教授を定年退官
	1968(昭和43)年 文化庁文化財保護審議会委員となる。「東京国立博物館東洋館」竣工
	1973(昭和48)年 文化功労者となり文化勲章受章
	1974(昭和49)年 「迎賓館赤坂離宮和風別館」竣工
	1978(昭和53)年 金沢市名誉市民第1号となる。「金沢市立図書館(現・金沢市立玉川図書館)」を息子の吉生と共同設計
	1979(昭和54)年 満74歳で永眠。従三位勲一等瑞宝章を追贈

谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館

2019年

設計 | 谷口建築設計研究所

吉郎の精神を受け継ぎ、 金沢の建築文化を育む拠点

谷口吉郎が育った住まいの跡地を、その遺言により谷口家が金沢市に寄贈。市の意向で建築博物館が建てられることになり、吉郎の長男・谷口吉生が設計を手がけた。

館内は地下1階に企画展示室、2階に常設展示室が2つずつあり、大きい常設展示室には、吉郎の和風建築の傑作として名高い「迎賓館赤坂離宮 和風別館『游心亭』」(1974)の広間と茶室が再現されている。その空間のプロポーショナルを体感し、空間をつくり上げた職人の優れた技を見てほしいという吉生の考えによるものだ。

「游心亭」の再現工事は、50年前にオリジナルの施工を担った水澤工務店が担当。「写し」をつくるのは非常に難しく、図面通りにつくっても何か違うものになる。現地の空気感を知っているかどうかが一番大きいため、職人は皆、現地で採寸を行った。また、広間の敷台の板と茶室の床板は、オリジナルを建てた当時のもので、水澤工務店に偶然残っていたという。屏風や襖の織物も一部残っていたから再現できたなど、この再現には奇跡的なことが続いた。

金沢建築館は谷口父子の建築資料を保管所蔵する。館長の水野教授は「谷口父子の顕彰とともに、市民の建築への興味関心を高めることと、建築の面白さを広く情報発信すること。これら3つの目的のもと活動していきたい」と話す。谷口が守り育てたものが、この場所から次代に向けて新たに育まれていく。

- 1 「游心亭」を再現した常設展示室2。広間から広縁の上まで架かる天井は、平天井と斜め天井の組合せからなる。外部の水庭の向こうには犀川を望める。敷地の犀川側は段状に緑化され、川へと下りられる階段も設けられている。正面の白い戸は、吉郎の和風建築の空間と吉生の現代建築の空間とを仕切る、いわば結界。吉生は設計の際、この部分のあり方に非常に悩み、何度も描き直したという
- 2 端正な建物は寺町通りに面し、敷地周辺は重要伝統的建造物群保存地区。建物は周辺の町家のスケールに合わせて、エントランスの庇は低く長く、通りに面するガラス空間は奥の石張りの箱より高さを抑えている。また、ガラス空間に設置したアルミスクリーンにより、夜は行灯のように建物がまを照らす
- 3 地下1階の企画展示室1は中庭に隣接し、外光が入る
- 4 茶室は、能舞台のような小間4畳半の畳席と、それを囲む立礼席からなる。平天井と傾斜天井、網代天井を組み合わせ、それら間に空調や照明を仕込んでいるのが見どころ
- 5 広間は一の間(47畳)と二の間(12畳)からなる。今回の再現工事を担当した親方は、オリジナル当時の現場を知っていたため、技を継承することができた【写真：北嶋俊治】



1



2



3



4



5

MAP 3

07

旧金沢市立図書館／別館

現・金沢市立玉川図書館／近世史料館

1978年

総合監修 | 谷口吉郎 設計 | 谷口・五井設計共同体

現代建築と煉瓦建築が軒を合わせて立つ

1913（大正2）年に建てられた旧日本専売公社の工場跡地に立つ。当時の煙草工場の正面部分だけを保存・改修し、郷土資料の別館とする一方、それに軒を合わせて図書館本館を新築する計画だった。

図書館本館は、吹き抜けの大きな閲覧室のある開架部門棟と、事務室や学習室などの管理部門棟の間に中庭を設けている。両者を切り離すことで、閲覧室が「街の本屋の軒先のように気楽に本と触れあえる場所」になるようにした。開架部門棟は鉄骨造だが、中庭の床や管理部門棟の中庭側の壁は赤煉瓦で仕上げ、新旧2つの建物を自然に、巧みにつなげている。

開架部門棟の外壁はコールテン鋼板。ディテールを省いたコンセプチュアルな表現にすることで、別館の折衷的な意匠をもつ外観とは「全く対立させた」と谷口吉生は記す。コールテン鋼板は、いまは赤みを帯びている。「当初はもっと黒かった。金沢の町家のように黒っぽい色でした」と水野教授。「外側をシンプルなデザインで暗い色にしたのは、公園のなかに静かに存在させたかったからでしょう」。

親子初の共作は、吉生にとって金沢で初の作品でもある。「吉郎さんはしよっちゃん吉生さんに、金沢から学べ、と言っていたそうです」。



1



2

- 1 図書館本館の中庭から別館方向を見る。緑色の大梁が煉瓦壁に映える。吉生が構造部材を露出させることは珍しい
- 2 管理部門棟の通路に造り付けられたソファは、中庭の植え込み周りの煉瓦と一体に見せるデザイン
- 3 開架部門棟の円柱から管理部門棟の煉瓦壁まで約30mの大梁を架け、その間に曲面のカーテンウォールの壁を立て、開架部門と中庭を区切っている



3

MAP 3

08

旧石川県繊維会館

現・金沢市西町教育研修館

1952年

設計 | 谷口吉郎

瓦葺きの切妻屋根を架けた モダニズム建築

朝鮮特需による「糸へん景気」のころに、「石川県繊維会館」として建てられた。1983（昭和58）年に市が購入し、2001（平成13）年に改修。現在は金沢大学のサテライト・プラザが入居する。

地上3階・地下1階建てで、全体の形はモダニズム的だが、切妻屋根にして瓦を載せている。これは周辺の町家と「喧嘩しないようにする」ためであり、金沢の雨や雪の多さに配慮したものである。窓に庇を付け、雪が積もっても支障のないように正面1階の壁を奥ませたうえでタイルを貼ったのも、そうした理由からだ。

戸室石を敷き詰めたアプローチから屋内に入ると、玄関の奥は変化のある階段が巡る吹き抜け空間で、その中央に折り鶴形の照明器具が浮かぶ。「階段を構築的に巡らせた、このような吹き抜け空間は、谷口さんが設計した慶應義塾大学や東京工業大学の校舎などにも見られます」と水野教授。「卒業設計で工場建築を取り上げるなど、谷口さんは工学的なものへの関心も強い人でした」。また、印象的な折り鶴形の照明器具について水野教授は「流し雛がモチーフの室生犀星文学碑など、谷口さんの作品には具象的な表現が見られることがあり、焼物屋の息子だなと思います」と語る。

床、壁、天井の仕上げには木や石、煉瓦などの地元産材が細やかに採り入れられ、谷口の故郷への優しさを感じることができる。



1



2



3

- 1 空中に折り鶴形の照明器具が浮かぶ階段ホール。雪が積もっても外光が入るように高い位置に水平窓を設けている。階段下の壁面は六角形の石で、これは亀甲紋を意識したものと思われる。床は鉄平石を自然のまま組み合わせた乱貼り。2001年の改修工事では1階をできるだけ竣工当時の姿に戻そうと、床はタイルカーペットを撤去してこの鉄平石を現し、耐火煉瓦貼りの壁も復元した。写真手前の地下への階段は、竣工当初はなかった
- 2 1階の交流サロン。この天井も改修時に石膏プラスター塗りの竿付き天井にした。正面奥の展示ケースに保存されているのは、石川県出身の画家・宮本三郎が1954年に描いた、「産業と文化」と題する壁画。合板に油彩で描かれている
- 3 外観。2階と3階はモダニズムデザイン由来の水平窓が連続する。地面への積雪に配慮して1階の壁面を上階より少しセットバックしている

金沢建築めぐり

KANAZAWA

参考

- 石川県内の文化財 (https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kanko_koryu/bunka/index.html) 2019.12.12アクセス
- 金沢市 公式ホームページ「金沢市の文化財と歴史遺産」(https://www4.city.kanazawa.lg.jp/11104/bunkazaimain/bunkazaimain.html) 2019.12.12アクセス
- 文化庁 国指定文化財等データベース (https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp) 2019.12.12アクセス
- 『北國文庫』第78号、北國新聞社、2019
- 水野一郎監修『いしかわ建築の博物館』北國新聞社、2019
- 山出保『まちづくり都市 金沢』岩波書店、2018

おことわり

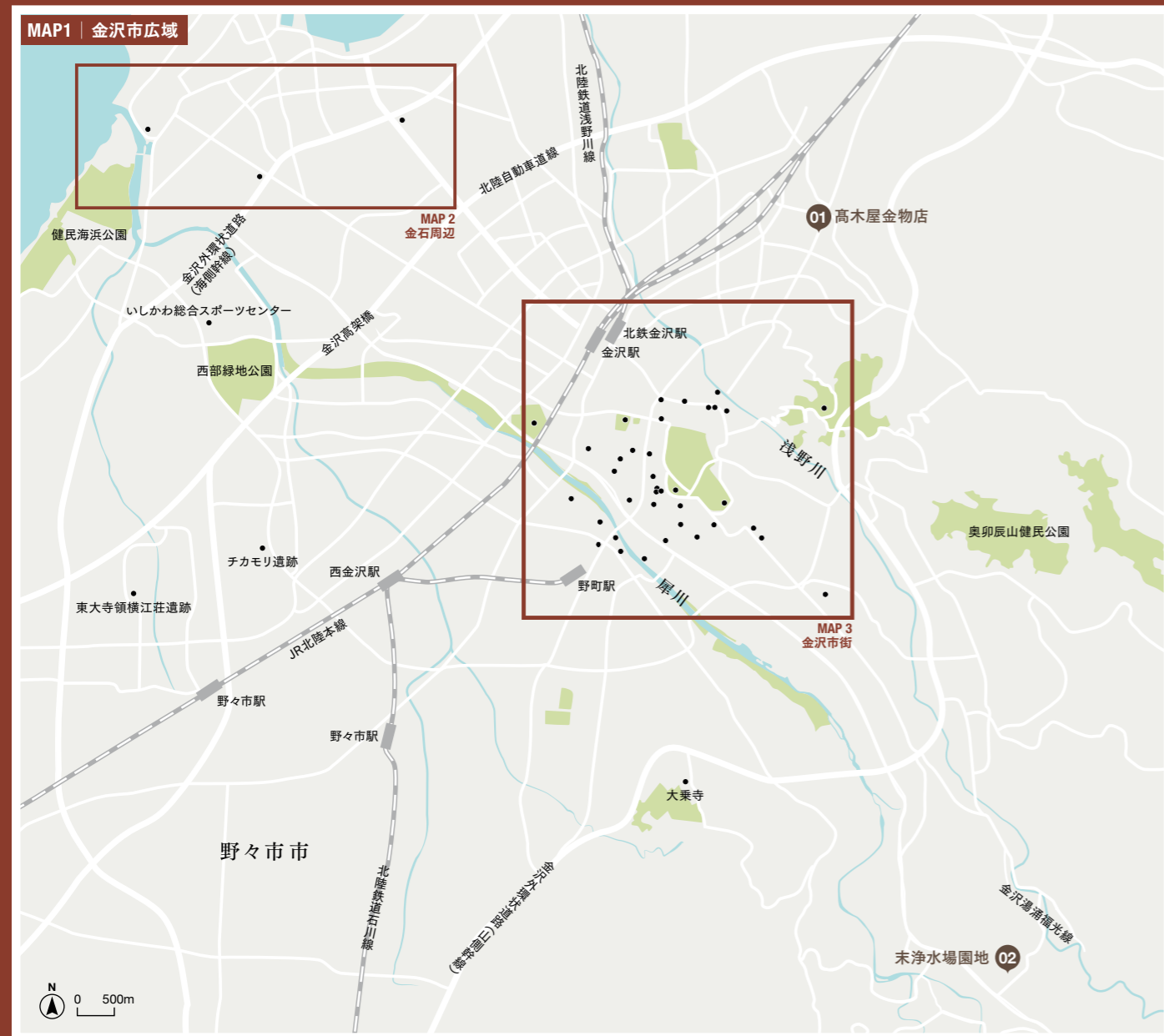
04-21ページの作品名称は文化財指定名称とし、ほかは原則として2019年5月時点の施設名称を使用しています。

金沢を都とした加賀藩は幕府を除けば全国最大の石高を誇った国。当時の大名屋敷・成巽閣や兼六園、金沢城櫓など江戸期の建築が多く残る。また、明治期には繊維業で栄え、軍都として重視されて、会館、庁舎、学校、軍需施設などの近代建築が建設されているに姿を残す。歴史的建造物が多いのは空襲を免れたこと、昭和期の破壊的な大規模再開発がなかったことによる。そのような伝統建築と近代建築の遺伝子を受け継いで誕生したのが谷口吉郎だ。昭和以降の金沢は谷口建築の宝庫でもある。金沢の風土から生まれた谷口は、また金沢の風土を守る主力となり、近代までの名建築が継続した。結果、金沢には建築力が

培われた。21世紀美術館をはじめとして、コンペが成功をおさめた現代建築が話題を集めている。金沢建築は時代のモザイクと言われるゆえんだ。

またここは犀川と浅野川の2つの河川に削られた河岸段丘の上に広がるまちでもある。河川から70～80m高台にある台地のまちへ、川のはるか上流から用水を引いてきた江戸時代からの歴史がある。豊かな水を利用した堀と土塁を組み合わせた惣構の跡が市街地にも残り、都市インフラの構造もユニークだ。

写真 | 小松正樹(特記以外)



01

高木屋金物店

改修設計 | やまだのりこ／あとりいえ。
 竣工 | 1870年ごろ
 改修 | 2016年
 金沢市大樋町4-7
 1848年に鍛冶屋として創業した金物店。昭和初期に前面道路の拡幅とともに更迭したが、間取りに大きな変更はなく現在に至った。改修のきっかけは、物置となっていた部屋の整理と、設計者との出会いだったという。あたら手が加えられた部分をしつらえ直し、座敷や作業場だった蔵の前のスペースは整備してレンタルスペースとして開放した。「古いだけだと思っていた物が、先代から私たちへの贈り物だと気づきました」と店主は言う。業態も、自ら選んだ伝統を今に活かした金物の販売等へと一新した。蔵から発見した長持ちやタンスが店舗のディスプレイとして活かされている。第41回金沢都市美文化賞受賞



03

コッレかないわ

設計 | ナカエ・アーキテツク
 竣工 | 2016年
 金沢市金石西1-2-15
 日本海に面した港町・金石(かないわ)に立つ複合施設。事業主であり施設の運営にあたるのは、金石で1943年に創業した加賀建設だ。「少子高齢化が進むなかで、まちの活性化を考えた」と、同社経営本部の鶴山本部長はいう。港近くの同社の駐車場を敷地とし、小さな丘を中心に飲食店・物販店・オフィスが入る3つの建物を計画。港や白山連峰が望める丘の上のテラスも含め、内外ともに人々が自由に行き交い、滞留する場となっている。第24回いしかわ景観大賞受賞



04

金沢海みらい図書館

設計 | シーラカンスK&H
 竣工 | 2011年
 金沢市寺中町11-1



市立の図書館で1階に交流施設と児童図書コーナー、2・3階に一般図書コーナー、生涯学習コーナー、日本海情報コーナーとものづくり情報コーナーを収める。天井高が12mもある巨大なワンルーム空間。ガラスブロックを打ち込んだGRC(ガラス繊維強化セメント)のパチンクウォールを透して、昼間は読書に適した均一な光が内部に入り、夜は内部の光が外へと漏れる。2013年BCS賞、2015年日本建築学会作品選奨ほか受賞多数



02

末浄水場園地

設計 | 石井一夫
 竣工 | 1932年
 復原 | 2010年(前庭)、2015年(着水井上屋)
 金沢市末町1-1
 兼六園に並び、国の名勝に指定された浄水場。インフラとしての名勝は日本で唯一。開設から2年後、東屋や幾何学意匠をもつ泉水のある前庭が建設された。台地がある金沢は、犀川のはるか上流から用水を引かねばならず、江戸時代から利水が発達していた。その用水を利用し犀川を水源として「緩速」と「急速」ろ過で製造する浄水施設だ。水を沈澱、ろ過する池が主な施設だが、機器は上屋に取られている。そのひとつ、取り入れた水の水質、水量を調べる着水井上屋と前庭は、竣工当時の姿に復原された。国指定名勝(園地・2010年)、登録有形文化財(緩速系施設・2001年、着水井上屋・2016年)



05

金沢ビーンズ(明文堂書店 金沢県庁前本店)

設計 | 迫慶一郎／SAKO建築設計工社+大和ハウス工業
 竣工 | 2007年
 金沢市鞍月5-158
 金沢県庁近くのロードサイドに位置する約80万冊の蔵書を誇る大型書店。「ビーンズ」の愛称が表すように建物全体が豆形の曲線で構成されており、カウンターやサイン類にも豆のモチーフを採用。1階から3階へと直線的につづくエスカレーターを中心に避難階段を室外化することで、切れ目のない開放的な内部空間が作り出されている。座り読みのできるソファやベンチが随所に置かれ、平日も多くの人々でにぎわう。2008年グッドデザイン賞受賞



06

金沢市民芸術村

設計 | 不詳(旧倉庫)
 改修設計 | 水野一郎+金沢計画研究所
 竣工 | 大正末期-昭和初期(旧倉庫)
 改修 | 1996年
 金沢市大和町1-1

08

旧石川県繊維会館

(現・金沢市西町教育研修館)
 設計 | 谷口吉郎
 改修設計 | 約谷建築事務所
 竣工 | 1952年
 改修 | 2001年
 金沢市西町3-16

p.08参照

p.14参照

p.15参照

p.09参照

11

旧三田商店(現・ギャラリー三田)

設計 | 大林組
 竣工 | 1930年
 金沢市尾張町1-8-5
 1930年の国道整備計画をきっかけに、現在の場所に洋品店・三田商店が店舗として建築。その後、さまざまなテナントに貸してきたが、現在は初代から建物を受け継いだ主人がアンティークショップを営む。建物は、鉄筋コンクリート造2階建て。外壁のスクラッチタイルは特注の品で、数十年前に大規模修繕を行い、美しい姿を取り戻した。コリント式柱頭やステンドグラスなど、正面玄関まわりに集中した装飾が見事。登録有形文化財



13

八百萬本舗

設計 | 不詳
 改修設計 | E.N.N.
 竣工 | 江戸後期
 改修 | 2015年
 金沢市尾張町2-14-20
 江戸後期の町家リノベーション。蔵、別棟合わせて100坪を超える屋根裏部屋付き木造2階建ての旧金物店。これまで増改築を重ねてきたが、旧店舗閉店にともない複合ショップとしてリニューアルした。1階は土間と室内に取り込まれた土蔵が連続する物販、2階は畳座敷。地下には江戸時代から遺る惣構堀の水路がまだ活かされている。第38回金沢都市美文化賞受賞



10

元金沢貯蓄銀行

(旧北陸銀行尾張町支店、現・尾張町町民文化館)
 設計 | 不詳
 竣工 | 1907年
 金沢市尾張町1-11-8
 江戸時代、前田利家入城の際に出身地である尾張の荒子から町人を招き寄せて住ませたことに由来するという「尾張町」一帯には、歴史ある建物が多い。土蔵造りのこの建築も、そのひとつ。蔵を載せた屋根、黒漆喰と赤土室石の外壁に対して、内部は白漆喰仕上げで、アーチや付柱といった西洋古典建築のモチーフが精緻に再現されており、内外で異なる意匠が見どころ。1976年に銀行支店としての役割を終え、現在は尾張町商店街が建物を管理・活用している。県指定有形文化財



12

旧石川銀行橋場支店(現・金沢文芸館)

設計 | 清水組
 竣工 | 1929年
 金沢市尾張町1-7-10
 ひがし茶屋街・主計町茶屋街近くの交差点に面し、銀行支店として建てられた建物。金沢市が改修し、現在は文芸館として活用されている。鉄筋コンクリート造4階建てで、外装は石張り。入口両側のイオニア式の付け柱、アーチ型の窓とアーチ頂部の要石、敷地形状に沿わせて曲線を描いた外観は、このエリアのランドマークとなっている。市指定保存建造物、登録有形文化財



14

大樋ギャラリー

設計 | 隈 研吾
竣工 | 2014年
金沢市橋場町2-17

金沢の伝統工芸「大樋焼」。その窯元・大樋長左衛門窯は、加賀藩主が茶道奉行として京都より仙叟宗室(裏千家四代)を招いた際に同道して以来、350年以上にわたり主に茶盆等の茶道具を制作している。ギャラリーは、十一代大樋長左衛門の邸宅(市指定保存建造物の武家屋敷)の一角に建つ。重厚な屋敷と繊細な竹格子で構成されたギャラリーが溶け合い、落ち着いたまちなみをつくり出している。竹や和紙は、地元の素材が用いられた。裏手にある大樋美術館には歴代の大樋長左衛門の作品等が展示されている



15

徳田秋聲文学碑

設計 | 谷口吉郎
竣工 | 1947年
金沢市卯辰山公園

17

金沢市文化ホール

設計 | 芦原・谷口建築設計
共同企業体
竣工 | 1982年
金沢市高岡町15-1

18

尾山神社神門

設計 | 津田吉之助
竣工 | 1875年
金沢市尾山町11-1

19

旧第四高等学校本館

(現・石川四高記念文化交流館)
設計 | 山口半六・久留正道
竣工 | 1891年
金沢市広坂2-2-5

24

堅町商店街

金沢市堅町

江戸時代に犀川河川敷を埋め立てて形成された古くからの商店街。戦後はファッションの発信地として注目され、衣料品店が多い。江戸期から4.5mの狭い道幅は変えず、そのため地区整備計画を制定して壁面をセットバックしたため12m幅の回遊スペースが確保された。一方、同計画で庇の設置も義務づけられたが高さに幅があるためユニークな風景が生まれた。建築家の塚本由晴氏は、かつてこの店の横顔に個性の表われた景観を「リーゼント通り」と称した



26

山錦楼

設計 | 不詳
改修設計 | 竹中建築計画工房
竣工 | 1922年ごろ(伝承)
改修 | 2001年
金沢市寺町5-1-38

犀川大橋そばの段差のある敷地に立つ料亭。正面からは3階建て、川側から見ると4層の犀川沿いのランドマークとなっている建物。初代が現在地に建築後、いく度か改修が施され、壁に群青色を配した3階の「月の間」(写真)は、あとから増築されたと考えられている。地下の水まわりには、竣工当時のタイルと色ガラスが残る。2001年には、昭和以降に改修された部分を撤去し、徹底した復元・改修を行った。2002年グッドデザイン賞受賞、市指定保存建造物



25

室生犀星記念館

設計 | 森俊偉+ARCO建築・計画事務所
竣工 | 2002年
金沢市千日町3-22

27

安藤芳園堂ビルディング

設計 | E.N.N. + みづぼ工業
竣工 | 2017年
金沢市野町1-2-43

香林坊、片町の繁華街から続いている旧北国街道は、犀川を渡ると寺院が集中する文化地域・寺町通りと交わる。その歴史ある重要交差点の一角を占める複合ビル。交差点側の共用階段が、外と鉄骨やワイヤーメッシュで仕切られているだけなので、視線も空気も交差点に開放されて出入りが自由。商用ポテンシャルの高い交差点建築をまことに開く好例だ。1階に薬局、カフェ、2階にレストラン、3階にオフィスなどが入る



16

聖霊病院聖堂

設計 | マックス・ヒンデル
竣工 | 1931年
金沢市長町1-5-30

大正末期から昭和にかけて日本に滞在し、各地でカトリックの教会堂等建築を手がけたスイス人建築家M.ヒンデルの設計。ロマネスク様式を木造で忠実に再現している。チロル風の鐘楼が目を引き外部に対して、内部は柱に黒漆、祭壇の背部に金箔、アーチの縁取りに群青を配するなど、金沢の地に合わせた素材が用いられている。石造の形態を木造で再現した交差ヴォールト、ドイツから取り寄せた柔らかな色合いのステンドグラスも美しい。いまも多くの人が、祈りに集う。市指定文化財



20

四高記念碑

設計 | 谷口吉郎
竣工 | 1958年
金沢市広坂2-2-5
金沢出身の彫刻家・吉田三郎による明治、大正、昭和、3代の四高生の学生像が載る。台座側面には、四高が金沢から南下して京都三高へとスポーツ遠征するためにつくられた「南下軍の歌」の一節が刻まれており、「南下軍の碑」とも呼ばれる。創立70周年を記念して建てられた



21

第四高等学校寮歌記念碑

設計 | 谷口吉郎
竣工 | 1971年
金沢市広坂2-2-5
第四高等学校創立85周年を記念して建てられた碑で、「北の都の碑」とも呼ばれる。四高の校章である北辰(北極星)をかたどっており、材には地元の戸室石が使われている



22

石川県政記念 しいのき迎賓館

設計 | 矢橋賢吉・笠原敏郎
改修設計 | 山下設計
竣工 | 1924年
改修 | 2010年
金沢市広坂2-1-1

23

旧佐野家住宅

(現・金沢学生のまち市民交流館)

設計 | 不詳
改修設計 | 金沢計画研究所
竣工 | 1916年
改修 | 2012年
金沢市片町2-5-17
大正時代の町家の意匠や外観をそのままに改修した「学生の家」と、料亭の部材を移築・新設した「交流ホール」からなる施設。「学生の家」は、市内に多くの農地を有した大地主・佐野家の本宅だった建物で、変化の激しい繁華街に位置しながら、主屋、蔵ともに創建当時の姿を残している。あわしの束、黒漆喰で構成された外観も特徴。学生団体や市に登録した市民活動団体などが利用できるが、1階の和室とサロンは、見学可能。第36回金沢都市美文化賞受賞、市指定保存建造物(撮影協力:金沢学生のまち市民交流館)



32

金沢21世紀美術館

設計 | 妹島和世+西沢立衛/
SANAA
竣工 | 2004年
金沢市広坂1-2-1

34

旧金澤陸軍兵器支庫

(現・石川県立歴史博物館)
設計 | 陸軍省経理部
改修設計 | 五井建築設計研究所(1986年)、長村建築事務所(2015年)
竣工 | 1909年(第5号兵器庫[現・第3棟])、1913年(第6号兵器庫[現・第2棟])、1914年(第7号兵器庫[現・第1棟])
改修 | 1986年、2015年
金沢市出羽町3-1

33

鈴木大拙館

設計 | 谷口吉生/谷口建築設計事務所
竣工 | 2011年
金沢市本多町3-4-20

35

旧石川県美術館

(現・石川県立伝統産業工芸館)
設計 | 谷口吉郎
竣工 | 1959年
金沢市兼六町1-1

37

旧石川県第二中学校本館

(現・金沢くらしの博物館)
設計 | 山口孝吉
竣工 | 1899年
金沢市飛梅町3-31

28

谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館

設計 | 谷口建築設計研究所
竣工 | 2019年
金沢市寺町5-1-18

29

室生犀星文学碑

設計 | 谷口吉郎
竣工 | 1964年
金沢市中川除町犀川河畔

30

旧川縁米穀店(現・金澤町家情報館)

設計 | 不詳
改修設計 | むとう設計
竣工 | 江戸末期
改修 | 2016年
金沢市茨木町53

31

金沢歌劇座

監修 | 谷口吉郎
設計 | 日建設計工務
改修設計 | 釣谷建築事務所
竣工 | 1962年
改修 | 2010年
金沢市下本多町6-27

36

旧ワイン館

(現・北陸学院ワイン館)

設計 | トマス・クレイ・ウィン
改修設計 | 山岸建築設計事務所
竣工 | 1888年
改修 | 2010年
金沢市飛梅町1-10

アメリカ人宣教師T.C.ウィンが自邸として建てた建物。木造2階建てで、外壁は下見板張りペンキ仕上げ。1、2階にベランダがつく。コンクリートスタイルの建物は、竣工当時、評判になり大勢の人が見学にきたと伝えられる。施工は地元の棟梁。そのため小屋や狐格子など、和の要素が入っているのも特徴。1898年にウィン夫婦が大阪に転任後、幼稚園の園舎として使われていたが、改修し、北陸学院史料館として現在も大切に使用されている。市指定保存建造物

